

▼▼「世界有数の国際人でした」。こう藪中三十二（やぶなかみとし）さんが切り出した。外交の現場に長年身を置いた元外務事務次官である。山辺町出身の元常設国際司法裁判所長・安達峰一郎の業績と葛藤を伝える先日のBS番組だった。

▼▼「山辺を案内してもらったこともあります」とも。6年前、山形県勢懇話会の講師として来県した際、安達の生家などをご覧いただいた。以来、藪中さんは外務省の大先輩に関心を寄せる。今年4月、本紙「直言」の筆者に就いてから最初に取り上げたテーマも安達である。

▼▼「語学の天才」だった安達は海外での外交官暮らしが長かった。草創期の国際連盟では難しい交渉のまとめ役を託された。常設国際司法裁判所長に選ばれてからも、国際法の圧倒的知識を基に周りの信頼を勝ち取った。だが同じ頃、日本は満州事変を起こし孤立の道を歩む。

▼▼日本の国益と国際法の狭間（はざま）で懊悩（おうのう）した安達は健康を害する。一方、母国で講演した際の言葉も番組は紹介した。「戦争は決して世の中の発展、人類の発達に必要でないということを私は確信いたします」。武力で事に当たっている国の指導者には、今こそ耳を傾けてほしい。